

From the Pulpit of the Japanese Baptist Church of North Texas  
August 9, 2015

救いと賛美  
詩篇 43

43:1 神よ、わたしをさばき、神を恐れない民にむかって、わたしの訴えをあげつらい、たばかりをなすよこしまな人から／わたしを助け出してください。

43:2 あなたはわたしの寄り頼む神です。なぜわたしを捨てられたのですか。なぜわたしは敵のしえたげによって／悲しみ歩くのですか。

43:3 あなたの光とまことを送ってわたしを導き、あなたの聖なる山と、あなたの住まわれる所に／わたしをいたらせてください。

43:4 その時わたしは神の祭壇へ行き、わたしの大きな喜びである神へ行きます。神よ、わが神よ、わたしは琴をもってあなたをほめたたえます。

43:5 わが魂よ、何ゆえうなだれるのか。何ゆえわたしのうちに思いみだれるのか。神を待ち望め。わたしはなおわが助け、わが神なる主をほめたたえるであろう。

詩篇 42 篇と 43 篇はもとは、三つの部分から成り立つ、ひとつの詩篇でした。それは、42:5、42:11、43:5 に「わが魂よ、何ゆえうなだれるのか。何ゆえわたしのうちに思いみだれるのか」という、同じ言葉のくりかえしがあることから分かります。

また、詩の内容を見ていくと、三つの部分が、順序を踏んでいることが分かります。42:1-4 の部分では「わたしはかつて祭を守る多くの人と共に／群れをなして行き、喜びと感謝の歌をもって彼らを神の家に導いた。今これらの事を思い起して、わが魂をそそぎ出すのである」（42:4）とあって、「過去」を振り返っています。次の 42:6-10 の部分では「わたしのあだは骨

も砕けるばかりに／わたしをののしり、ひねもすわたしにむかかって／『おまえの神はどこにいるのか』と言う」（42:10）とあって、「現在」の苦しみを訴えています。そして43:1-4の部分では「その時わたしは神の祭壇へ行き、わたしの大きな喜びである神へ行きます」（43:4）とあって「将来」の救いを待ち望んでいます。この「しかが谷川の」の詩歌は、このようにひとつのまとまりを持っていて、「過去」、「現在」、そして「将来」へとその内容が進んでいます。

きょうは、「しかが谷川の」の第三の部分を取りあげます。この詩の作者がどのようにして「現在」の苦しみから「将来」の希望へと進むようになったかを学びたいと思います。

## 一、神の救い

43:1と2では、詩人はまだ「現在」の苦しみの中にいます。詩人は、今、外国の地において、まことの神を知らない人々から、朝も昼も「おまえの神はどこにいるのか」とののしられています。「おまえがこんな目にあっているのは、おまえが何か悪いことをしたからだろう。おまえの信じる神はおまえを見捨てたのだ」という非難を受けたのです。そんな中で、詩人は言います。「神よ、わたしをさばいてください」と。

皆さんは、これを読んで「おや」と思いませんでしたか。なぜ、「彼らをさばいてください」ではなく、「わたしをさばいてください」なのでしょう。ふつうだったら、自分を苦しめている人々をやっつけてくださいと言うのではないのでしょうか。ここで言われている「さばく」には、「立証する」とか「弁護する」という意味があります。詩人は、自分がこのような目にあっているのは、自分のせいではないということを立証してくださいと、神に願っているのです。もちろん、聖なる神の前に、何一つ責められるところはない、完全に正しいと言うことがで

きる人は誰もいません。しかし、何か不幸な出来事が起こったとき、それがその人や先祖の特定の罪から来たのだという考え方は間違っています。病気や事故は、正しい人の上にも、悪い人の上にも、神を信じる人の上にも、神を否定する人の上にも同じようにやってくるからです。ガリラヤの人たちがローマの総督に殺されたとの知らせが届いたとき、主イエスはこう言われました。「それらのガリラヤ人が、そのような災難にあったからといって、他のすべてのガリラヤ人以上に罪が深かったと思うのか。あなたがたに言うが、そうではない。…また、シロアムの塔が倒れたためにおし殺されたあの十八人は、エルサレムの他の全住民以上に罪の負債があったと思うか。あなたがたに言うが、そうではない。…」(ルカ 13:2-5) 災難や苦しみにあった人たちに同情し、慰め、助けるのが、人として正しいことなのですが、人は、時に、「それは彼らの罪のせいだ」と言って、その人たちを責めたり、冷淡な態度をとってしまうことがあります。災いや苦しみの原因は、人には正確に知ることはできないのですから、人の苦しみの原因を「こうだ」と決めつけたり、そのことで人を責めたりするのは間違っています。

かつて、日本では障がいのある人たちが、軽蔑の目で見られました。子どもを連れて歩いていた人が、障がい者に出会ったあとで、自分の子どもに、「いい子にしていないと、あんなふうになるんだよ」と言うようなことが、ごく最近までありました。今から二千年も前の時代は障がい者に対する目はもっと冷たいものでした。イエスの弟子たちでさえ、生まれつきの盲人を見て、「先生、この人が生れつき盲人なのは、だれが罪を犯したためですか。本人ですか、それともその両親ですか」と言ったほどです。弟子たちの問いに対するイエスの答えは、こうでした。「本人が罪を犯したのでもなく、また、その両親が犯したのでもない。ただ神のみわざが、彼の上に現れるため

ある。」（ヨハネ 9:3）人の目の冷たさに比べ、主イエスのまなざしはなんと温かいことでしょうか。人は苦しむ人を見て、その苦しみの原因を詮索しますが、主イエスはその苦しみの目的を見抜かれます。どの痛みも、主イエスにあっては、痛みで終わらない、神の愛の栄光へと導かれていくのです。

自分の身の上にふりかかった災難ばかりでなく、それに対する人々からの言われのない非難、攻撃、あるいは冷たい視線を受けるとき、その痛みは何倍にも大きなものになります。この詩人は、そんな状況の中にありました。もし、この人に神への信頼がなかったら、おそらく、人々の非難に対して非難を、攻撃に対して攻撃をやりかえして、争いになったことでしょう。信仰者は、どんな非難を受けても、ただ黙ってそれを受け入れればいいわけではありません。間違っただけのものには立ち向かいます。しかし、自分で相手にやりかえしたりはしません。神にさばきを委ねます。ダビデは詩篇 26 篇で「主よ、わたしをさばいてください。わたしは誠実に歩み、迷うことなく主に信頼しています。主よ、わたしをためし、わたしを試み、わたしの心と思いとを練りきよめてください」（詩 26:1-2）と祈っています。詩篇 43:1 の「神よ、わたしをさばいてください」という祈りも、詩篇 26 のダビデの祈りと同じように、神を自分の弁護人として呼び求める祈りです。

痛みの中でも神が共にいて、わたしの弁護者となってくたさる。ここに信じる者の拠り所があります。聖書はこう教えています。「もし、神がわたしたちの味方であるなら、だれがわたしたちに敵し得ようか。ご自身の御子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、御子のみならず万物をも賜わらないことがあるか。だれが、神の選ばれた者たちを訴えるのか。神は彼らを義とされるのである。だれが、わたしたちを罪に定めるのか。キリスト・イエ

スは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである。」（ローマ 8:31-34）。わたしたちはこの確信に立って、苦しみの日にも、落胆、絶望せず、神に救いを祈り続けることができるのです。

## 二、神への賛美

詩篇 43 の 1-2 節で、詩人は現在の苦しみを神に訴え、救いを祈り求めましたが、3-4 節では将来に向かって歩み出しています。「あなたの光とまことを送ってわたしを導き、あなたの聖なる山と、あなたの住まわれる所に／わたしをいたらせてください。その時わたしは神の祭壇へ行き、わたしの大きな喜びである神へ行きます。神よ、わが神よ、わたしは琴をもってあなたをほめたたえます。」詩人は、「聖なる山」エルサレムに帰り、神の住まいである神殿に戻れるようにと祈っています。礼拝を回復することをひたすらに願い、それが回復されると信じて祈っています。詩人はかつてはエルサレムの神殿で神を礼拝していました。ところが今は、外国の地において、かつてのように神を礼拝することができなくなりました。もちろん、どこにしようと神に祈ることはできます。実際、詩人は外国の地でも、こうして祈っているのです。しかし、そこではエルサレムのように、人々と共に神殿に詣で、賛美を歌い、犠牲をささげ、「願わくは主があなたを祝福し、／あなたを守られるように。願わくは主がみ顔をもってあなたを照し、／あなたを恵まれるように。願わくは主がみ顔をあなたに向け、／あなたに平安を賜わるように」（民数記 6:24-26）との祝福に送り出されるということが無いのです。神を愛する者にとって何よりもつらいことは、礼拝を守れないということです。そして、礼拝から遠ざかることは、神から遠ざかることだったのです。

彼は外国の地で、実際的にも精神的にも大きなストレスを受

けていました。けれども、彼にとっての救いは、そこで不自由なく暮らせることでも、自分を苦しめている人たちを見返すことでもありませんでした。神を礼拝すること、心いっぱい神に賛美をささげることだったのです。神がわたしを救ってくださったので、神に感謝して礼拝するというだけではなく、神を礼拝するということ自体が救いなのです。神に近づき、神を礼拝することの中に救いがあるのです。

神はエジプトで奴隷だったイスラエルを救い出されたあと、イスラエルにテント式の神殿や契約の箱、また祭壇などを作って礼拝をささげるよう命じられました。神がイスラエルをエジプトから導き出されたのは、イスラエルが自由に神を礼拝することができるためでした。モーセはファラオに「イスラエルの神、主はこう言われる、『わたしの民を去らせ、荒野で、わたしのために祭をさせなさい』」（出エジプト 5:1）と言いましたが、この言葉の中に、神がイスラエルを「礼拝する民」としようとしたみどころが表されています。イスラエルにとって、神を礼拝することが救いの目的であり、救いそのものでした。

それは、新約時代の神の民であるクリスチャンにとっても同じです。礼拝はクリスチャンの信仰と人生の中心です。クリスチャンは、日曜日に日常の生活から離れて神の前に出ます。仕事も、勉強も、スポーツも、趣味も、娯楽も一旦家に置いて、教会に来て神の前に集まるのです。日常を離れ、思いを天に向けます。わたしたちの賛美や祈りが天にいる御使いたちと聖徒たちの賛美や祈りに溶け込むようにと、心を込めてそれらを捧げます。人間の知恵や知識によっては決して知ることのできない、天の奥義を神の言葉によって学びます。そして、この礼拝から、再び日々の生活へと遣わされていくのです。一週間、168時間のうち礼拝の時間はたった1時間ですが、これを守ることによって、残りのすべての時間が守られていきます。わた

私たちの生活に天の光が差し込み、一週間の生活がさらに意味深いものとなるのです。クリスチャンの生活は礼拝を中心に回っています。もし、クリスチャンの生活に礼拝がなかったら、それは芯棒の無いコマのようなもので、その生活はちきんと立って回らず、ゴロゴロと転がるだけのものになってしまいます。旧約時代に神殿から離れること、礼拝から遠ざかることが神から遠ざかることだったように、新約の時代も、教会から離れ、礼拝から遠ざかることはやはり、神から遠ざかることになるのです。

新約聖書は、教会を「エクレシア」と呼び、礼拝を「レイトウルギア」と言います。「エクレシア」は、もとはギリシャの都市国家での自由民の集まりを指し、「レイトウルギア」はそこで行われる儀式を意味しました。「エクレシア」に属することができるのは自由民だけで、それは大きな特権でした。また、「レイトウルギア」に参加することも自由民に与えられた特権であり、また義務でした。新約聖書が教会を「エクレシア」と呼ぶのは、教会がイエス・キリストによって罪から解放された自由な神の民の集まりだからです。礼拝を「レイトウルギア」と言うのは、礼拝が神の民にとっての特権であり義務だからです。礼拝は神の民の義務ですが、決して重苦しい義務ではありません。それは喜ばしい義務であり、何にも勝る特権です。病気のため礼拝に出られなかった人や、寝たきりの親の介護のために礼拝に出られなかった人が、ひさしぶりに礼拝にもどってきて、礼拝に出られることのありがたさをつくづく感謝していたのを思い起こします。神からいただいたこの義務を喜び、この特権を生かしたいと思えます。

礼拝を守りたいと思っても、やむをえないことで礼拝を守れなくなることがあります。年52回の礼拝の大部分を守ることができるのは大きな恵みです。ですから自分の都合で礼拝を休

むことがないようにしましょう。気が進まないからといって礼拝を休んでいると、今度は、礼拝に出たいと思っても出られなくなるようなことが起ってくるかもしれません。そんなことにならないよう、今までもそうしてきたように、これかも礼拝を守る生活を続けていきましょう。

詩人は苦しみの中から神に救いを願い求めました。苦しみの日には、ひたすらに神に救いを願い求めればよいのです。しかし、その救いは、神を礼拝することの中にあることを忘れないでいきましょう。苦しい状況を抜け出せたとしても、それによって神に近づき、神を礼拝するのでなければ、その救いは半分の救いでしかありません。詩篇 50:15 に「悩みの日にわたしを呼べ、わたしはあなたを助け、あなたはわたしをあがめるであろう」とあります。神がわたしを助けてくださる。これが半分。そして、わたしが神をあがめる。これが残りの半分です。残り半分があってはじめて救いが完成するのです。詩人が現在の苦しみの中でも将来の礼拝へと目を向けたように、わたしたちも、神の救い、助けを信じ、たとえまだ苦しみの中にあっても、賛美を先取りして、それを神にささげていきたいと思いません。

### (祈り)

父なる神さま、わたしたちは、あなたを礼拝するために救われたこと、あなたを礼拝することの中に救いがあることを学びました。苦しみの日、このことを思い起こして実行することができますように。苦しみの中でもあなたに助けを願い求めるとともに、あなたを賛美することができますよう、導いてください。主イエス・キリストのお名前です。